知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

NOVEMBER 2018 11

灯りに浮かぶ、町への思い

灯りに浮かぶ、町への思い

夏の終わりから秋にかけて、CCNCエリアではいくつかの灯りイベントが行われる。
ちょっとした異世界の雰囲気が楽しめると毎年好評だが、
それらのイベントには自分が暮らす町を愛する人たちが関わっている。

竹灯りイベントは今や、
美浜町の晩夏と初秋の風物詩だ。

美浜町の新名物、竹灯り

美浜町で開催される竹灯りイベントをご覧になったことがあるだろうか。

これは町民有志によるグループ「美浜竹灯籠の会」が主催する企画で、八月下旬に河和地区で開催される「みはま竹灯りin全忠寺」と、九月上旬に野間地区で開催される「冨具の竹灯り」の二本立てで行われる。野間の方は平成二十七年から、河和の方は平成二十八年からスタートし、美浜町の夜を彩る恒例行事としてそろそろ定着してきた感のあるイベントだ。野間での竹灯りは、今年は雨のため残念ながら中止になってしまったが、年を追うごとに評判が広がり、地元のみならず遠来の人や観光客の来訪者も増えているという。

いったいどんな風景が見られるのか。「冨具の竹灯り」の様子を覗いてみることにしよう。

イベントが始まるのは日が傾き始めた午後五時。会場は、野間灯台の近くにある冨具神社。伊勢湾に小さく突き出した冨具崎のすぐ上にある神社で、その由緒にまつわる話を本誌２０１７年７月号の特集「岬の名を聞けば」で紹介した。山の中腹にある社殿へは国道２４７号から急傾斜の車道が通じているが、〝表参道〟はその西側にある長い石段である。

その参道から竹灯りは始まる。竹筒に模様を彫り込んだ手製のランプシェードに蝋燭を立てて火を灯しているのだが、鳥居の手前から参道の両側にずらりとそれが置かれている。光の筋が参道を縁取り、それが鬱蒼とした森の中へと細長く伸びている。どこか妖しさも漂わせるその雰囲気は、まるで異世界へと通じる道のよう。わくわくとどきどきが綯交ぜになり、なんとなく探検気分というか、子供のころに戻ったような心持ちだ。

仄かな灯りに導かれるまま、慎重な足取りでゆっくりと石段を上がってゆく。その一段一段の両側にも全て竹灯りがある。薄暗い中を登りきり、灯りに従って左へと進んで拝殿前の広い空間へと出れば、そこに待っていたのは圧巻の光景だ。夥しい数の竹灯りが一面に置かれ、やわらかであたたかな光が境内いっぱいに広がっているのである。

その景観は単に美しいだけでなく、神社という空間もあいまってか、どこか厳かでもある。大勢の人が詰めかけているので騒々しくてもおかしくないのだが、誰もが見入っているからか、なんとなく静けさの中にいるようなのだ。夜も更けて周囲の闇が深くなると、闇にぼうっと浮かぶ竹灯りはよりいっそう魅惑的にゆらめき、見る者を夢現の境地に引き込んでいく。

河和で開催される「みはま竹灯りin全忠寺」は、美浜町でも有数の古刹、全忠寺が会場となる。こちらは開催時期が夏休み中ということもあり、光を使ったパフォーマンスなども催されて賑やかだ。今年は、地面にカラフルな光を映し出す「LED竹灯籠」も初めて実施し、好評だったとか。

同じ竹灯りイベントでも趣向や雰囲気が少し異なり、両方に行った人も充分楽しめたことだろう。来年以降も継続していく予定というので、楽しみに待ちたい。また、美浜町総合体育館で十一月下旬から一月上旬まで開催される「みはまイルミネーション２０１８」でも見ることができる。

町への思いを竹灯りに込めて

美浜町の竹灯りイベントで使われる竹灯籠の数は、なんと約三千八百本。平成二十七年に初めて開催した時には約八百本だったそうで、四年の間に三倍以上も増えたことになる。イベントを主催する「美浜竹灯籠の会」の会員たちが、地道にこつこつ作り続けてきたものだ。開始当初は、東浦町の「於大まつり前夜祭」で竹灯籠イベントを開催してきた先輩団体「東浦竹灯篭の会」から借りたり、指導を受けて製作に取り組んできたが、昨年からは「独り立ち」して、完全に自分たちが作ったものだけをイベントに使用できるようになったという。

竹灯籠作りは、約二十人の会員が月に一度集合して行われる。町内の山林へ竹を伐採に行くところから始まって、黴を防ぐための洗浄と乾燥、適当なサイズに裁断、柄の切り抜きと、すべて手作業だ。作業場は河和台地区の外れに位置する「九十九の里」。ここは竹炭作りのための小屋で、九十九の里は竹炭作りグループの名称でもある。二十年ほど前、美浜町内の里山を侵食する竹をなんとか活用しようという行政の呼び掛けに応じて、町内の集落ごとに竹炭作りグループが発足したが、九十九の里はそのうちの一つで、今も精力的に活動を続けている。長年にわたり活動しているだけあって竹の扱いはお手の物で、竹灯籠の会と九十九の里の両方に参加している会員がいたこともあり、竹灯籠作りの協力を請うたという。

この竹灯りイベントはどのような経緯で始まったのか。主催者は「美浜竹灯籠の会」だが、この会の母体になって

人々のアイデアと実行力で、この町がもっと魅力的になる。

いるのは、町内で地域づくり活動を行っている「一般社団法人 美浜まちラボ」で、第一回はここの主催で開催されたという。

その美浜まちラボは、六年前に美浜町が各地区で実施したまちづくりワークショップをベースに始まった住民有志の集まりがルーツ。まちづくりに関する意見交換会を月に一度行ううちに、「話し合うだけではなく実際に行動しないと意味がない」という思いが高まり、平成二十五年に任意団体「美浜まちラボ」を立ち上げた。

活動開始当初、会員たちの間でよく話題に上ったのが「町の西側の人は東側のことを、東側の人は西側のことをよく知らない」ということだった。美浜町は昭和三十年、三河湾側の河和町と伊勢湾側の野間町が合併して発足したが、合併から六十年を経てもなお、町の中央に横たわる丘陵地が〝壁〟になっているのでは…というのだ。

そこで、それぞれの地域のことをもっとよく知ることから始めようと、町歩きイベントを平成二十六年二月に開催する。「歴史！なぞ解き！まち歩き」と題したこの企画は、野間大坊の周辺の史跡を巡るクイズラリーで、美浜町民を中心に五百人ほどの参加者があり、大盛況だった。

美浜まちラボの活動はこれを皮切りに加速し、町に活力をもたらすアイデアがいくつも生まれてくる。その中のひとつとして浮上したのが竹灯りである。「美浜町は観光の町として知られているけれど、夜のイベントが何もないよね？」ということから、会員の伊藤健さんが提案したもの。竹の駆除と竹炭作りに力を入れてきた美浜町にはふさわしいと会員たちも賛同し、平成二十七年八月、美浜まちラボ第二弾イベントとして「冨具の竹灯り」が始まったのだった。

イベントの成功に手ごたえを得た美浜まちラボは、この企画に専門で取り組む「美浜竹灯籠の会」を設立。そして、まちラボ設立当初に課題として挙げていた町の東西の融合を目指して、翌年からは河和の全忠寺でも竹灯りをスタートさせた。回を重ねるごとに町外にも評判が広まり、今では他市町のイベントに竹灯籠を貸し出すこともあるという。

野間灯台に登りたい！

その美浜まちラボは、他にも面白い企画に取り組んでいる。そのひとつが「野間灯台登れる化プロジェクト」だ。

これは企画名のとおり、野間灯台（正式名称は野間埼灯台）に登れるようにしよう、というもの。三重県の大王埼灯台や静岡県の御前埼灯台など、全国には登ることができる有名灯台がいくつもある。しかし知多半島を代表するランドマークでもある野間灯台は、常駐の管理者がいないこともあって、残念ながら通常は一般公開されていない。もし登れるようになれば、美浜町の目玉スポットとして今以上に親しまれる存在になるはずだ。

発案者は、小学校で教員を務めるかたわら活動に参加する林達之さんで、野間小学校に勤務していた六年前、総合学習の一環として児童たちと野間灯台について調べたことが、野間灯台に興味を覚えたきっかけ。平成二十七年から取り組みをスタートし、行政のサポートを得て名古屋海上保安部にも働きかけ、最終目標は、野間灯台が百周年を迎える二〇二一年に、常時一般公開を実現することだ。

この活動をもっと知ってもらおうと、今年の七月十四日から灯台のライトアップが行われている。漆黒の伊勢湾を背景に浮かび上がる白亜の灯台は、昼間に見るのとはまた違った味わいがあって、なかなかいい。当初は九月上旬までの予定だったが十一月十一日まで延長され、十一月四日には一日限定の一般公開が実施される。

美浜まちラボはこれ以外にも、今年の四月から名鉄知多奥田駅構内にできたまちづくり交流拠点「Chabs（ちゃぶだいハウス）」の管理・運用を行うなど、美浜町で存在感を示している。Chabsの活動については、いずれ改めてレポートしたい。

先人を偲ぶ「陶と灯の日」

灯りイベントと言えば、CCNCエリアではもうひとつ外せないものがある。毎年十月十日に常滑市のINAXライブミュージアムを主会場に開催される「陶と灯の日」だ。こちらは平成二十二年から始まり、今年で九回目。昨年は「土・どろんこ館」前の広場が主会場だったが、今年は煉瓦煙突が目印の「窯のある広場・資料館」前の広場いっぱいに陶製のランプシェードが広げられた。その光景はどこかポップアートのようでもあり、美浜町のイベントとはまた違った趣なのが面白い。当日はINAXライブミュージアムの全館無料開放や、テラコッタパークのライトアップも行われた。

開催日は、曜日に関係なく十月十日で固定されている。というのもこの日は、常滑の窯業発展の功労者である伊奈長三郎の命日であり、長三郎を偲びつつ、約千年の歴史を誇る常滑焼

●野間灯台ライトアップ
11/11（日）までの毎日、19～22時
【問い合わせ】美浜まちラボ 0569-89-2421

●野間灯台一般公開
11/4（日）、10時30分～15時（雨天は中止の場合あり）／入場無料（当日、入場整理券を配布）／駐車場は「食と健康の館」を利用
【問い合わせ】名古屋海上保安部交通課 052-661-1615

を後世に受け継いでゆく決意を新たにすることを大きな目的にしているからである。

伊奈長三郎は明治二十三年（一八九〇）、代々の陶工の家に生まれた。東京高等工業学校の窯業科で学び、大正十年（一九二一）に伊奈製陶所を設立。陶管、タイル、電纜管（電線を地下に埋設するための陶管の一種）などの生産で会社を大きくして常滑の経済発展に寄与する一方、町会議員や常滑町長、初代常滑市長、業界団体の要職などを歴任。さらに、陶芸研究所を設立するなど常滑焼の技術向上や後進育成にも力を注いだ。昭和五十五年（一九八〇）に九十歳で没するまで、産業・行政・文化のさまざまな方面で常滑の発展に尽くしてきた。窯業に携わる人や常滑市民でなくても、ぜひ知っておきたい郷土の偉人だ。

使われた陶製ランプシェードはおよそ千五百個。陶芸家や職人たちが製作したものだけなく、市内の小学生が製作したものも含まれている。じっくり見るとデザインが多彩で、なかなか楽しい。一つ一つの灯りには、一人一人の思いが込められている。長三郎翁も、天から灯りを眺めて笑みを浮かべていることだろう。

いくつもの灯りに照らされた道が、過去から未来へと続いてゆく。

取材協力◎一般社団法人美浜まちラボ／美浜竹灯籠の会／常滑商工会議所　参考文献◎伊奈長三郎物語（陶と灯の日事業委員会）

※冨具の竹灯り、陶と灯の日の写真は2017年に撮影したものです